

平成 30 年度

第 2 回

地域自立のための「人づくり
・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 30 年 7 月 19 日（木）

第2回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 平成30年7月19日(木) 午前10時から午前12時まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第一会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典
副委員長 池上 重弘
委員 片野 恵介
委員 清宮 克幸
委員 白井 千晶
委員 豊田 由美
委員 埜 博
委員 藤田 尚徳
委員 マリ クリスティーヌ
委員 宮城 聡
委員 山本 昌邦
委員 渡邊 妙子

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 第1回静岡県総合教育会議開催結果
- (2) 「技芸を磨く実学」の奨励(スポーツ、文化芸術)
- (3) その他

【開 会】

事務局： ただいまから第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日は、お忙しい中、またお暑い中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めます文化・観光部総合教育局長の長澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、加藤委員、竹原委員、仲道委員、藪田委員、渡部清花委員が所用のため欠席となっております。

それでは、開会に当たりまして知事から御挨拶を申し上げます。よろしくお願い致します。

川勝知事： 皆様、どうもおはようございます。お暑い中、参加いただき誠にありがとうございます。

10時きっかりに始めるのですね。今、気がつかれたでしょうか。ジャ

一ナリストが10時10秒前に入ってきたのです。そういう人たちのことを考えまして、集まっても時間どおり始める。物すごくパンクチュアルな国ですね、この国は。もう信じられないぐらい。時刻表どおりには新幹線も何もかも動くので、時刻表をベースにしたサスペンスが成り立つのは日本だけですね。

時刻表は、1830年代にイギリス人が発明したのですが、今のABCの何とかという時刻表も時間どおりではないのです。イタリアでは6時の電車だと思って、間に合わないと思ったら1時間ぐらいとまっていたりするわけです。この国は大変な国だと思います。

この部屋も富士山だけが今日は見えませんが、これはなかったです。「仙客来り遊ぶ雲外の巔」という石川丈山の漢詩ですが、あの時計しかなかったのです。もう実に殺風景で。

そして、皆様お気づきでしょうか。ここにお花、バラとかトルコキキョウとかガーベラが、必ず置いてあるのです。これが置いてあって気付く人と気付かない人に、人類は2つに分けられるのです。

県庁の役人は、こういうものに全く関心がなかった。書類しか関心がなかった。サービス産業であるにも関わらず、人の心に訴えることを何もしないということで、時計は最低限必要ですが、やはりそれなりにしつらえたものは大事ではないかと。

今日は、「技芸を磨く実学」について先生方に御議論を賜りたいと思っておりますが、前回、5月8日に第1回の実践委員会を開きましたときには、「知性を高める学習」について様々な素晴らしい御意見を賜りまして、1カ月後の6月7日に行われました総合教育会議には、池上副委員長に御出席賜りまして皆様の御意見を伝えました。

子供たちの予習・復習はもちろん大切かもしれませんが、それだけではなくて、一人一人の子供の夢や希望があります。そうしたものを上手に引き出すことが大事だと。

先生方はICTを必ずしも得意でないと、これは最近の潮流ですから、大学生を含めて民間の人たちも活用したほうがいいという意見をおっしゃられましたところ、教育委員の先生も同じお考えの方が多く、それを認めていただきまして、これを実践していくという段取りになっております。後で池上先生から御報告があるかと思えます。

昨日、長谷部誠選手がお越しになりました、本当に私ども静岡県の誇りなのです。いつサッカー選手になりたいと思ったのかと聞いたのですよ。そうすると、17歳のときには確実にプロで生きようと決めたと。夢は小学校のときから持っていたと。だけど、中学でやっても周りがすごく強い。どうしても目立てないと。しかし、サッカーができる高校に行って、急速に高2から高3にかけて誰もが認める力が出てきたということで、それを見抜いてくれた服部という先生がいて、昨日は服部先生と御一緒に来られたのです。要するに子供が夢を持っていて、長谷部君は、算数で100点を取ると全然思っていなかったと。彼は、サッ

カーなのですよ。

そして、前に言いましたが飯塚翔太さん。あの人もリレーで銀メダルをリオや世界大会でとられました。今は一番年上ですけども、いつ、あなたは陸上でやろうと思ったのと本人に聞いたのですよ。中学3年生のときだと。受験してどこかへ行くのではなくて、陸上ができるところに行くと言います。陸上ができる大学へ行った。そして、高校でも全然鳴かず飛ばずだったそうですよ。大学で急に、があつと伸びたわけですね。だけど彼は、もう中学校のときに決めていたわけです。

僕の好きなボクシングの村田諒太、彼は立派でしょう。その彼の書いたものを見たのですけれども、中学のときに自分はボクシングで行きたいと、もう決めていたそうですよ。それで、とにかくアマチュアでチャンピオンになって、金メダルをとって、そして、やっぱりやりたいということでプロに転向して、それも実に立派なものです。

それから最近、藤井聡太君が14歳で50勝、そのときに、もう佐藤名人や羽生さんにも勝ったりして、もう彼は将棋以外に行かないと決めていると思います。だから10代で決めている。

今日は、山本さんや清宮さんに来ていただいて、こういう名人がいるわけです。もちろん宮城先生も。そういう実学をやっている方たち、実学と言うとおかしいですが、技芸を磨いてきた人。いつのときにサッカーをやるとか、ラグビーをやるとか、演劇に進むと決めたのかと。

決められない人は、普通高校に行けばいいと。大学に行って、モラトリアムです。決められない子がいるのです。

だけど、決める子もいるのです。そういう決める子は、体で覚えなくてできないので、そういうのはなるべく早く育てる。15歳まで義務教育ですから、後は自由です。

めちゃくちゃ勉強のできる子は、何も高校3年間、牢獄の中にいる必要はないのです。もう大学に行って自由に勉強ができる。だから、知性も高めるときにそういうものをやる。

ただし、みんなに対して基礎的な知識や技芸を身に付けてもらうことは大切ですけれども、私は長谷部君の話聞いても、その他のこういう名人のお話を聞いても、10代で決まると思っておりまして、だから技芸を磨く道も生きる道の重要な一つだと。どれも、どれが上、どれが下ということはないと思っております。そういう方向に社会を持っていきたいと考えております。そのためには社会総がかりでやっていかないとけません。

だから、学校の先生は学校の先生として、これは非常に尊いお仕事ですから、先生は先生としての道をなされればいいと。しかし、他の道も同じように大切だということを子供たちに知らしめるような、そういうシステムを本日つくり上げたいと思っております。

ちなみに、伊藤美誠ちゃんと平野美宇ちゃんが、この間、世界大会で両方とも銀メダルをとりましたね。御両者とも中学のときにもうトップ

です。遠くは岩崎恭子さんが中学生で金メダルをとりましたね。ですから、もうこの子たちはそのときから決まっているわけです。こういう子がいるのだということをよく知った上で、我々は教育に対していろいろなサジェスチョンをいただいて、それを実施していきたいと思っておりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

事務局： ありがとうございます。

それでは議事に入りたいと思います。

これからの議事進行は、矢野委員長にお願いいたします。よろしくお願い申し上げます。

矢野委員長： どうも皆様、おはようございます。

暑い盛りですが、それを吹き飛ばすような勢いで、皆様の思いのほどを述べていただきたいと思います。それを具体化するための用意は調っておりますので、どうぞ忌憚のない御意見をお願いします。

では、次第に基づきまして議事に入ります。まずは第1回静岡県総合教育会議の開催結果でございます。

6月7日に会議が開かれまして、池上副委員長に御出席いただきましたので、当日の議論の中身について、お話をいただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

池上副委員長： 池上でございます。

6月の総合教育会議には矢野委員長が御欠席ということで、私が代理で出てまいりました。その内容を皆様に御報告させていただきます。

本日の資料の1ページに資料1として、平成30年度第1回静岡県総合教育会議開催結果という紙がございます。これが全体を見通すもの、2ページ目までですね。その4番、議事がまず大事なので御確認いただければと思います。「知性を高める学習」の充実（確かな学力の向上）ということで、前回、この実践委員会でも学力とは何だろうという話に皆様の御意見が集中したことを御記憶かと思えます。

資料の3ページをめくっていただけますでしょうか。

そこに第1回総合教育会議の論点がございます。これは、前回の実践委員会で議論した論点と同じ2つです。すなわち論点1が、大学や地元自治体等との連携などによる学力向上、学習習慣定着、授業改善等の取組、論点2が、学力向上に向けたICTの効果的な活用というこの2つでした。

また、委員の皆様からいただいた御意見は、実践委員会の資料の意見としてまとめて総合教育会議に提出をいたしました。それが資料の4ページから8ページまでになります。

なお、5ページ以降の委員の皆様様の御意見が書かれてある分ですが、発言者の氏名は記載をしていない形で配付しています。

総合教育会議では、これらの資料をもとに、私から実践委員会でこのような御意見があったことを御紹介いたしました。その結果、また戻りますが、資料の1ページから2ページのところにある「5 出席者発言要旨（抜粋）」のとおりのお御発言がありました。そこで、皆様には1ページに戻っていただいて、「5 出席者発言要旨（抜粋）」を御覧いただきたいと思います。

まず、論点1については、基礎学力の習得についてAIを有効利用し、先生方の時間的・精神的余裕を生み出すことにつなげるべきだという御意見がありました。つまり、AIそのものの活用はもちろんだが、今、あまりに現場の先生方が忙し過ぎる。本来の対人関係、対面関係において生身の教師が、生身の子供たちと対峙して何をやるべきかよりも、事務処理、あるいは保護者対応で時間を取られている。本末転倒ではないかと。そこでAIを使って、本来教育の場において生身の人間同士がやるべきことをきちっとできるようにサポートしていく方向に使うのも重要なのではないかとという御意見でした。

次に、教育長から県のコアスクールについて御紹介がありまして、とても良い取組で、時間をかけて評価や修正を行って、新しい魅力ある学校をつくるのが大切だという御意見がありました。1年、2年ですぐ効果が出るとは限らないけれども、特色のある学校づくりには是非邁進していただきたいということでした。

1ページの残りの4つは、いずれも教師や学校の役割を問う内容でした。例えば、知識・技能は自宅で学習して、学校ではディスカッションを行う。学校でやるべきこと、できること、これを厳選すべきだという御意見です。最近では、大学などで反転授業という言葉が使われます。反対に転ずる、反転授業。つまり、自宅において大学の教授が作成したパワーポイントなどを見て、あるいは動画資料などを見て、いわゆる知識の部分は自分で入れておく。それをもとに対面の場においてはディスカッションであるとか、あるいはその教材の疑問点を明らかにしていくという時間の使い方を反転授業と言いますけれども、その反転授業のような提案がありました。

また、これはいささか私自身もショックな御意見だったのですが、東京での御経験が長い委員の方からは、東京においては子供たちの多くが塾で学んでいるとのことでした。義務教育の教育上の価値が低下しているという御指摘をいただいた上で、しかしながら、静岡県は義務教育がしっかりと機能しているので、静岡県としての義務教育のあり方を検討すべきだという御意見もありました。

それから、先生方には指導能力があると認めた上で、教師の負担を減らし、指導能力を発揮できる環境を整えるべきだと、あるいは教師のやるべき仕事を見直すべきだという意見がありました。

一方で、めくっていただきまして、2ページの上の2つのように、新しい学習指導要領では歴史総合という科目が新設されますけれども、こ

ういった科目に現在の先生方がちゃんと対応して教えられるのか不安だという声、あるいは教師の資格を持っていない塾や予備校の先生方のほうが教え方が上手なので、子供たちが塾に行かざるを得ないのではないかという声が上がっていました。これはまとめて言うと、現場の先生方の研修が必要だということだと思います。教える科目が変わってきている、あるいは民間の塾・予備校の先生方のほうが、教育スキルが高くなっていると。そういった中で、学校教育において何を先生方が磨いていくのか、研さんしていくのか、見直しが求められるという御意見だったと私は理解しています。

次に、論点2についてです。

学力向上に向けたICTの効果的な活用という部分です。

ICTを子供たちの学びに活用するのはもちろんですが、むしろ先生方の事務的な負担を軽減するために、学校事務での活用が優先されるのではないかという意見がありました。

また、ICTを全ての授業で使うのではなくて、特定の単元で、実際には体験できないことを仮想空間においてバーチャルで可視化するという方向が有効なのではないかという意見がありました。すなわち全部が全部ICTだということではなくて、ICTの活用が有効な部分について効果的に使っていくという御意見でした。

また、ICTの操作・活用には、どうしてもスキルが必要になってまいります。ICT分野の人材バンクをつくって、シニア人材や学生など専門性を持つ適切な人材に学校の現場で支援をしてもらう仕組みづくりも大事なのではないかという御意見がありました。

これに関連して、教育分野におけるICT活用関連の学会で活躍している県内の研究者も多いので、そういった方々に県内で活躍できる場を提供してみてもどうかという御意見がありました。私自身、大学に身を置く者として、大学の先生方が学校現場で活躍するというよりも、学校の先生方、研究者がいろいろな人たちをコーディネートする枠組みをつくる上で、教育委員会や県と連携していくのが有効なのではないかという気がしております。

また、教員採用試験にICTの活用能力を問う試験科目を入れるべきだという御意見もありました。

このほかにも多くの意見が出ましたが、主な意見として以上を紹介させていただきます。

会議全体として、教育委員の皆様はこの実践委員会の御意見を受け止めていただいて、基本的には同じ方向性を共有できたという実感を持ちました。

以上が6月の第1回総合教育会議の報告になります。

矢野委員長： ありがとうございます。

前回のこの委員会での意見交換を振り返っていただいて、あるいはた

だいまの総合教育会議に関する報告を振り返って、何か御質問や御意見があればお願いしたいと思います。

私から一つ。

先ほど知事が触れられた、小さいときに才能を見出して、それを伸ばしてやると。どういう言葉で表現したらいいのかわかりませんが、英才教育というか、あるいはエリート教育というか、子供たちの大集団があって、それに物足りなくて上に飛び出そうとする人たちと、付いていけない人たちと両方います。

私も随分静岡で学校を回りましたが、付いていけない人たちに対しては、特別支援学校などの制度があって、いろいろ熱心になされている。先生たちも情熱的にやっているわけです。

上に飛び出そうとしている人をどうするかという問題については、学力の向上などをテーマにして、何か意見がありましたでしょうか。

池上副委員長： 私の記憶している範囲では、議論の焦点はそこにはなかったのですが、むしろ今度の総合教育会議の話題になるのかなという気がします。

ただ、非常に印象的だったのは、昨年度までこの委員会にもいた加藤百合子さんが、東京の子供たちの得ている刺激はすごいのだという話をしたことでした。私自身は東京で暮らしたことがないものですから、東京の子供たちがどういう刺激の中にいるのかわかりませんが、東京の子供たちは、学校教育のみならず、一歩外へ出るといろいろな大人たちと接していると。その刺激は、なかなかあなどれないものがありますという発言をされていたのが印象的でした。

そういう意味で言うと、7月の終わりのドリーム授業に宮城さんや私が出ていきますが、ああいうところで学校の先生とは違う大人と触れるのが一つの刺激になるのかなと思っております。

矢野委員長： ありがとうございます。

今年を通じて、機会があるごとに議論したいと思いますが、どういう言葉を使ったら良いかも含めて皆様の御意見を伺いたいですね。英才教育という言葉が良いのか、それともエリート教育と言えば良いのか。世の中にはいろいろな方がいて、誤解をされる動きもありますので、なるべく抵抗の少ない言葉が良いと思いますが、だからといって誤解を恐れてはいけないと思います。皆様に少しお考えいただいて、折に触れて御意見をいただきたいと思います。まだこの先、この委員会は続きますので、よろしくお願ひしたいと思います。

特に御質問などはございませんでしょうか。

片野委員、どうぞ。

片野委員： 前回の資料で、ICTを使った授業の写真の中に、数学の一次関数をやっているところ、その動点を生徒が動かしているような写真がありま

したが、塾は受験のテクニックや、勉強でスムーズに答えを解く方法に関して非常に長けています。それでは、義務教育の中で何をすべきかを考えたときに、いかにそれに対して、一次関数なら一次関数に興味を持ってもらうかだと思います。

けれども、それを伝えるのに教科書は非常に難し過ぎて、縦に読み横に読んでもわからない。わからないまま進むと本当に一次関数は大変になるのですが、そこでつまづかないようにするために、それがどういうものなのかを、「数学は情緒だ」と前回おっしゃられていたのを記憶していますが、左脳に訴えるのではなく右脳に訴えるような、情緒に訴えるようなことを考えてもいいと思います。

例えば、なぜ点Pは動くのかを演劇にするなど、子供たちにいかに興味を持ってもらうかにICTの技術は使えるのではないかと思います。

教科書を脱線して、1時間たつぷりと、自分の言いたいことを話して授業をしてしまう、大学の先生にありがちですが、そういう先生の話ほどよく心に残って勉強になるのです。そういう閑話休題的なものを、ICTの中に組み込んで子供たちが楽しく勉強できるようにできたらいいと思います。

前回、時間がなくて発言できなかつたので、発言させていただきました。

矢野委員長： ありがとうございます。

AIの能力の高さにみんな驚いてばかりいるのが現状ですが、それをどうやって活用するかで、いろいろな道が出てくると思います。ありがとうございます。

どうぞ、マリさん。

マリ・クリスティーヌ委員： 前回お休みして済みませんでした。

このICTについては、プラスの面もマイナスの面も両方あります。日本で生活していると、横文字の頭文字が入ってくると、何かすごく最先端のものをやっているのではないかという気持ちになります。AIが出たときもアーティフィシャル・インテリジェンスというのはほかに言いようがないものだから、AIと言っているのですね。

人工知能もプログラミングしているのは人間です。コンピューターは、もちろん速度が速いですし、情報収集がとても早いです。そういう点では、将棋をやる方とかゲームをする方を負かせられる、彼らのほうが、情報量が多いだけに人間を負かすことだってできるのです。

このICTを使うときに、気を付けなければいけないと思う点を幾つか言わせていただきます。

まず、ちゃんと目標と目的を持って、これで何をするのかを明確にして使うことです。

受け手側、私でもインターネットを見て検索すると、Googleのおかげ

で私が見たいものが全部入ってくるのです。そして、私の情報が偏るのです。普段見ているものがもっともっと入ってくるだけですから、私の持っているバーチャル世界は、こちら側に全部特化してしまう。バランス良く満遍なく見られなくなってしまうということを、大人であれば判別できるのですが、子供はできないのです。

最近のインターネット犯罪を見ている、子供たちに対する卑劣な犯罪、特に性暴力などは、大体若者がインターネットやアニメで見て、それが自分のマニュアルになって同じことを生きている人間の女の子にしてしまう。

ですから、良いものを学習するならいいのですが、こういうことに走ったり、入り込まれたりするということが、とても危ないことのひとつだと思います。

大人のほうが子供より、こういうテクノロジーに対して知識と技術力があるならまだいいのですが、むしろ子供たちの方が早くて、どんどん入り込めてしまいます。だから、このICTが、私たちの本当に重要な生活をとても良くしてくれる反面、そういうところもあるので、そこをきちっと振り分けながら、子供たちを守りながら、けれども教育として使っていくということを明快にして、目標を定めて、それに向かってやっていただけるといいと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。

これからICTは、AIも含めまして教育やいろいろな場面で進んでいくと思いますが、今の御指摘は大変重要な配慮だと思います。先ほど池上先生がおっしゃった生身の先生を含めまして、バーチャルな世界と現実との接点をどうつなげていくかという、その大きな課題についての御指摘でした。是非そういう点に配慮しながら進めていきたいと思えます。ありがとうございます。

ほかにございませんか。

藤田委員： 済みません、私も前回欠席して申し訳ございませんでした。

ICTの件で、実体験から一つお話をさせていただきます。

私の会社は料理屋をやっておりまして、今、ネットにレシピを全部動画で蓄積できるのです。会社で全てのことをそのネット上に落とし込んで蓄積していこうという中で、事務のほうは全部動画に入れられるのですが、どうも調理場のほうが進まない。

どこにその問題があるのかと思ひまして、たまたま昨日その会議をやったときに、技術を教えるに当たって、ネット上に「Teachme」というソフトがあって、そこに写真を撮ってレシピを入れておくだけで簡単に蓄積できるのですが、従業員や自分の部下に「それを見ておいて」と言うことで確かに教えることができるかもしれませんが。

しかし、温度など人間として感じるものまでは教えられません。

会社としても今後のことを考えたときに労働力が不足してまいりますので、どんどんそれに蓄積していきたいのですが、実際に食の現場、技術の現場では、そういうものは使い切れないことが判明してきました。

まさに今、マリさんがおっしゃったように、ICTを進めていくのはとても大事なことですが、同時にICTを進めることで、失うものや弊害も同時に議題の中に入れて検証する、何かのときに、技術を教えるのか、物を教えるのか、教育を教えるのか、何を教えて何が失われてしまうのかも同時に議題の中に入れるべきなのかなと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。

御指摘の点も十分考えながら進めていく必要があると思います。

ほかにはいかがですか。

それでは、いただきました貴重な御意見も具体化の段階で、是非反映して進めてまいりたいと思います。

それでは、本日のテーマであります「「技芸を磨く実学」の奨励（スポーツ、文化芸術）」に移りたいと思います。

まずは配付資料につきまして事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から説明いたします。

お手元の資料の9ページを御覧ください。

資料2に本日の論点を記載してございます。

本県の未来を担う「有徳の人」の育成を進めるに当たっては、英・数・国・理・社等の「知性を高める学習」だけでなく、小さな頃から農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ等の「技芸を磨く実学」に触れる機会を与え子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要があります。

特に、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムの開催を目前に控え、県民のスポーツや文化芸術に対する関心が高まる中、子供たちの興味を深め、能力をさらに伸ばす仕組みづくりが重要です。

論点として、事務局から次の2つを御提案させていただきます。

1つ目の論点は、子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進でございます。国際イベントの開催を一過性のものとすることなく、これを契機として、子供たちのスポーツ・文化芸術活動をどのように促進していくかについて御意見をいただければと存じます。

2つ目の論点は、異文化交流の促進でございます。国際イベントは、単にそのイベントを見る、あるいは参加するだけでなく、世界の文化に触れる絶好の機会です。この機会に子供たちの異文化交流をどのように促進していくかについて御意見をいただければと存じます。

次に、論点に関する資料の説明をいたします。

別冊の参考資料を御覧ください。2つ目の資料でございます。

1 ページをお開きください。

国際イベントの県内開催状況についてまとめてございます。このうち、2 ページにラグビーワールドカップ2019について、3 ページに東京オリンピック・パラリンピック自転車競技の本県開催について、4 ページにオリンピック・パラリンピック文化プログラムの推進についてまとめてございます。

次に、5 ページを御覧ください。

国際イベントの県内キャンプ地についてまとめてございます。

6 ページを御覧ください。

1 (1)①にございますとおり、県内在住の満18歳以上の男女を対象とした調査によれば、昨年1年間にスポーツをしたことがある人の割合は77.1%となっております。

7 ページを御覧ください。

(3)にございますとおり、「中学校や高校における体育の授業が、その後の自分自身のスポーツの実施に影響を与えていると思うか」との問いに対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて5割弱が「そう思う」と回答しております。

次の2 (1)を見ますと、「今の静岡県で、「スポーツを通じた交流が行われている」と思うか」との問いに対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて4割強が「そう思う」と回答しております。

8 ページを御覧ください。

3 (1)①にございますとおり、県内在住の満20歳以上の男女を対象にした調査によれば、昨年1年間にテレビやインターネット等のメディアを通して文化・芸術を鑑賞したことがある人の割合は83.2%となっております。

9 ページを御覧ください。

(2)の①にございますとおり、昨年1年間にホールや劇場等で直接文化・芸術を鑑賞したことがある人の割合は67.9%となっております。

11ページを御覧ください。

4 (1)にございますとおり、文化に期待するものとして「心の豊かさ」という回答が最も多くなっております。

12ページを御覧ください。

(3)にございますとおり、子供たちが文化・芸術に親しむ機会を充実するためには、「学校での芸術の鑑賞・体験教育を充実する」「子供たちが文化・芸術に参加・体験できるプログラムを設ける」という回答が多くなっております。

次の5にございますとおり、県内在住の満18歳以上の男女を対象にした調査によれば、「外国人や外国の文化に積極的に接しているか」との問いに対し、「十分接している」「どちらかといえば接している」を合わせて、接しているとの回答は2割弱にとどまっております。

13ページを御覧ください。

6 (1)にございますとおり、全国の10歳以上を対象とした調査をもとに10歳以上の小・中・高校生が、クラブ活動や部活動を含めて授業以外に過去1年間にどのような種類のスポーツを行っているか、まとめてございます。

14ページを御覧ください。

(2)にございますとおり、10歳以上の小・中・高校生が、クラブ活動や部活動を含めて授業以外に過去1年間にどのような種類の学習・自己啓発等を行っているかを見ますと、芸術・文化が小学校では15.6%、中学校では20.6%、高校では19.9%となっております。

次に、15ページから33ページにかけましては、今回の論点に関する県の取組についてまとめてございます。このうち、当実践委員会からこれまでに御提言いただいた幾つかの事業について現状を紹介いたします。

19ページを御覧ください。

県立高校における新学科等の調査・研究でございます。

19ページ下段の3にございますとおり、現在、スポーツ科、演劇科の設置について研究を進めており、次の20ページから23ページにかけまして、スポーツ科、演劇科に関する本県や他県の状況をまとめてございます。

24ページを御覧ください。

スポーツの人材バンクでございます。

24ページの下表にございますとおり、6月1日現在で237人の指導員が登録されており、このうち126人が部活動等の指導を行っております。

26ページを御覧ください。

磐田市をモデルに行っております地域スポーツクラブ推進事業でございます。2 (1)にございますとおりラグビーと陸上について常設のチームがございますが、昨年度は陸上で1名が全国大会の準決勝に進出し、また、ラグビーでは県選手権で優勝し、関西予選でベスト4に進出するなど実績があらわれてきております。

32ページを御覧ください。

県文化プログラムにおける「地域部活」への支援でございます。

2の「地域部活」の概要を御覧ください。

県西部地域の複数の公立中学校の生徒を対象に、音楽、演劇等の多彩なジャンルを体験できる文化系の部活動「地域部活」が平成30年4月に創部されました。県では、この地域部活に対し、平成29年度から運営の助言や財政的支援を実施しております。

33ページを御覧ください。

文化芸術分野の人材バンクの構築に向け検討を始めたところでございます。

1として既存の枠組みをまとめてございますが、これらの枠組みを生かしながら文化芸術の人材バンクの構築を進めてまいります。

次に、34ページから41ページにかけましては、県教育振興基本計画に

における「技芸を磨く実学」の奨励に関連する施策とその位置付けについてまとめてございます。

最後に机上に、参考といたしましてスポーツ分野、あるいは産業・芸術分野における本県高校生の実績をまとめた「技芸を磨く実学の星」、またパンフレット類としまして「東京2020オリンピック・パラリンピック」「ラグビーワールドカップ2019」の開催、「文化芸術の地域部活」を紹介いたしました「新時代の「課外活動」への挑戦」、先ほど池上副委員長から御紹介がありました、池上副委員長、宮城委員、加藤暁子委員に講師をお願いしております「未来を切り拓くDream授業」、以上を配付しておりますので、御覧いただければと存じます。

以上で、事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： 内容豊富な資料が提供されまして、どうも御苦労さまでした。

それでは早速、皆様の御意見を賜りたいと存じます。どなたからでも結構でございますので、よろしく願いいたします。

マリ・クリスティーヌ委員： 水を差すような感じで本当に申し訳ありませんが、すごく網羅されている子供たちがどのように考えているかというアンケートですが、これを男女別に分けることはできないでしょうか。

矢野委員長： どうですか。

事務局： 今、手持ちにはございませんが、確認してみます。

マリ・クリスティーヌ委員： 済みません。と言いますのは、私もオリンピックのお仕事を少しさせていただいておしまして、ついこの間、婦人科の先生たちのお集まりでお話を伺ったときに、女性がスポーツに参加するときに、特に今の女の子はとても早熟で、12、3歳、もっと若いときから生理になるのです。

そのときにスポーツに本格的に参加している女の子たちは、例えば生理が不順だったりすると、自分たちの動きとか活動はそういう時期に困るので、例えばピルを飲ませたりするのが外国のコーチのやり方らしいのです。そうすると彼らのパフォーマンスが安定したものになります。

それから、女の子たちが学校で体育の授業になると、今日は休みたいという話になったときに、本当にそういうことを理解して休ませてくれる先生なのか、それとも「少しのことは我慢なさいよ」と言われてしまうのか。

それと、やはり興味のあるもので違うと思うのです。多くの子供たちが文化・芸術は非常に高くなっていますが、この文化・芸術の中で、女の子の興味のほうが多いものなのか、男の子が多いのか、スポーツになると男性が多いのか、女性が多いのかによって対応の仕方が変わってくると思います。

例えばこの26ページに、トランポリンやラグビー、いろいろなものがありますが、女の子のサッカーはあるのですけれども、じゃあトランポリンにも女の子は参加しているのか、ラグビーに参加しているのか、こういうことは非常にパーソナライズして、フィジカルな性別、人間として女性と男性の差はないわけですが、でも、生理なども含めて体の違いがあるので、そういうニーズにちゃんと応えて差し上げられるような環境整備をすることによって、ターゲットすることがもっとしやすくなると思いますので、その情報があると、もう少し提案しやすいのではないかと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。

男女差の大きなテーマを拾い上げて、それを整理してみるといいですね。男女差が余りないものはこれでいいと思いますから。そういう目でもう一回資料をチェックしてみたらどうでしょうか。よろしくお願いします。

それでは、今日の議論の基本は9ページの論点です。これに基づく全般的な御意見でも結構ですし、それから具体的にこういうことをしたらいいのではないかという御提案でも結構です。

清宮さん、どうぞ。

清宮委員： おはようございます。

サッカーの日本代表のワールドカップでの活躍、本当にプライスレスな影響を我々静岡県民に与えてくれたと思います。

それはなぜかという、ラグビーのワールドカップへの追い風と言いますか、今回の日本代表の活躍がなければ、火を付けるために大変なエネルギーが要るのではないかと不安視していたのですが、恐らくもうこの火は消えずに来年の大会まで残っているという意味で、素晴らしい日本代表の活躍だったと思います。

来年のラグビーのワールドカップ静岡開催をいかに盛り上げるか、そして、盛り上げたレガシーをこの先にどう残していくかについて、僕は一つ提案したいと思います。

ターゲットは小・中学生なのですが、授業の中でラグビーを座学でできないかというのが一つの提案です。

これまでは、ラグビーボールを年に1回だけ触ってみるとか、ヤマハの選手が小学校を訪問して触れ合って遊んで、「わあ、ラグビー選手すごいな」みたいな、そういう触れ合いはあったのですが、大会を盛り上げて、その後にレガシーを残すために、僕は知識を子供たちに入れたいと思います。知識を入れて見たワールドカップは、感じ方が絶対違うはずで、それから10年、20年経って、ラグビーとはどういうものを理解したものは、その子供たちは忘れないと思います。

僕のイメージとしては、「君、ラグビーすごく詳しいけど、どこでラグ

ビーと関わったの」、「いや、私は静岡県出身なのです。静岡県の出身者は、みんなこれぐらいのラグビーの常識は持っています。」と語れるように小・中学生を指導したいと。それをすることが大会への盛り上がりにつながるのではないかと考えています。では何をするかというと、4回ほどの座学の授業をやっていただきたいと思います。月1回ぐらいで4月、5月、6月、7月ぐらいですかね。

それをやるための配付資料というか教科書ですが、今、世の中に、そういう授業に適した教科書がないのです。これを早急に作ったほうがいいと思います。

ラグビーの歴史、ラグビーのカルチャー、あとワールドカップって何、あるいはワールドカップで対戦する国々の歴史や、その国々の背景みたいなものもそこに織りまぜていくと、本番の試合観戦の盛り上がり方が絶対違うはずですよ。そういうものをやってはどうかと。

こんなことを考えている県は多分今のところない、静岡だけだと思います。これを静岡県がもし決めたとしたら、「いいねえ、それ」ということで、多分この考え方は、日本中の開催県に広まるのではないかと僕は想像しています。

そして、教科書を作って授業をしていただいたら、子供たちの興味も高まってくるでしょうから、そこにヤマハのラグビー部員を投入していきます。体の大きなラグビーボールを持った選手たちが、その段階で学校訪問をして、子供たちに少しラグビーと触れ合ってもらって、それでラグビーワールドカップ本番を迎えるというイメージでしょうか。そういうことができれば、今回のワールドカップを盛り上げることにようになりますし、レガシーにもつながっていくのではないかと思います。

矢野委員長： 資料18ページの県の取組という項目の23、24、25に、ラグビーワールドカップ2019に向けていろいろな計画が書かれているのですが、これとの関係はどうなりますか。今の清宮さんの御提案との関係について、事務局から説明をお願いします。

清宮委員： 関係ありません。僕は、静岡県ならではのオリジナルで何かできないかというアイデアを出ただけで、ここに書いてあるものは、恐らく全ての開催地でやることです。

矢野委員長： そうですか。

清宮委員： はい。

矢野委員長： 事務局から説明していただけますか。

事務局： スポーツ担当部長の広岡と申します。よろしく申し上げます。

18ページの23から25は、ラグビーワールドカップ2019を盛り上げるための一つとして、裾野の拡大と言いますか、子供たちにラグビーを教えるものでございまして、ここでは先ほど清宮監督から御提案がありました、例えば教科書といったものは特に御用意しておりません。

ラグビーは、体でぶつかり合って危険な面もございまして、子供にはなかなか危ないものでございまして、実際に学校を訪問して、タグラグビーと言いまして、リボンを腰のほうに付けて、それを取るとタックルした感じになるということで、まずはラグビーに触れてもらおうという形で進めているものでございまして、以上でございます。

清宮委員：ここに書いてあるのは、その会場や準備をしたところでいろいろな企画をしていくものですが、今回、僕が話しているのは、こちらから行く、各小学校にラグビーが下りてくるというイメージです。興味のある人が来て盛り上げるものではないということです。

こちらから落として、各小・中学校で揉んでもらった結果、ワールドカップの試合観戦にそのまま結び付けたい。できれば地元の大会ですから、チケットも用意して、子供たちに観戦させるところまで持っていければベストだと思っております。

矢野委員長：そういうことも可能なのですね。

清宮委員：日本戦は多分売り切れると思いますが、それ以外の試合は恐らく。大会のぎりぎりになると、もちろん売り切れて満員になると思いますが、あらかじめこの時点で、小・中学生をこのワールドカップに観戦させようという流れになれば、確保することは十分可能だと思います。

矢野委員長：それでは皆様、御意見を出してください。
いかがでしょうか。
白井さん、どうぞ。

白井委員：私、恥ずかしながら、ちゃんとしていないのですが、大学ときにラグビー部のマネージャーをしておりまして、その点から今のお話はすごく面白いなと思えました。

私自身はなんちゃってマネージャーみたいな感じで、ちゃんとできていなかったのですが、それでも例えば、けがの治し方とか、テーピングの仕方とか、栄養の取り方とか、筋肉の付け方とか、そういうマネージャー教育をしてもらったのです。

だから、ルールを教えることや、自分でボールに触れる機会もすごくいいと思いますが、せつかく教科書みたいなものを作って下におろしていくのであれば、私自身はマネージャーをしたときに、体を作るとか、栄養を取るとか、健康的な生活をするとか、チームワークとか、そうい

うものがすごく参考になったので、幅広い人間教育というか、技芸を磨くという観点から、スポーツに触れるのもとても大事だし、とても楽しいし、世界が開けると思いますが、どんな人でも楽しめるような総合的な何かができたら、とても面白いと思うし、すごく一生に残っていくものだと思います。

清 宮 委 員： マネージャーをされていたということで、奥様にするならば是非マネージャーをやるような女性がいいと常々思っております。

そういった側面もありますが、今回の僕のイメージも、ラグビーの競技自体のルールはそれほど重視していないというか、ラグビーの生い立ちとか、ラグビーが生まれてからどういうふうにならざるにそれぞれの国々で扱われてきたか。

例えば、イギリスで言うと、パブリックスクールの体を動かす教育の一つ、アイテムの一つとしてラグビーが成長していったとか、あるいは植民地支配の中でラグビーがすごく大きな影響を与えて、その国づくりに関わっていった。あるいは、ラグビーをやった人がどういう人材になって、どういうことを残したかとかという、何かそういうもの、いわゆる雑学です。ラグビーのワールドカップを10倍楽しく見るような、何かそんなものを教科書としてつくりたいのです。

もちろんその中に、体を守るために選手たちは何をやっているのかも入れたいと思います。ラグビーは、アメリカンフットボールのような防具はつけません。最近会った人の中に、「ラグビーはジャージの下にいろいろなものを付けているよね」という人がいましたが、「済みません。それは筋肉です。」という話をしたこともあります。

だから、本当にいろいろな角度のものを盛り込んだ、この静岡でしかない教材を是非作りたいのです。今なら作れるのです。この会議でやろうと言ってくれたら、それができて、恐らくですが、日本中の開催県が乗っかってきます。乗っかってきたときには、別に出し惜しみしなくてもいいのですよね。良いものは横に展開していけばいいと思います。是非、今日皆様の意見をいただきたいと思います。

渡 邊 委 員： 私は、ラグビーがほとんどわからないのですが、見ていると大変わくわくしてくる面白さがあります。あの発祥がイギリスだということも大変興味があるのですが、それ以上のことは言えません。

私は、日本の武道である居合いを少しやっておりますが、小学校から剣道を教育の中に入れるべきだと思っているのです。でも、簡単にはいかないのです。

なぜかと言うと、剣道も先生はたくさんいるのですが、清宮先生のように非常に教育に熱心で、ラグビーの本質を知っていて、その本質のところまで人間教育も含めてラグビーをしようとする人、そこまで徹底的に子供の教育ができる人間形成ができている人が少ないのです。だから、

ラグビーにもいろいろな人がいるのですが、清宮先生のような方は非常に少ないし、静岡で得がたい人だから、静岡で清宮先生がいるからこぞできるということがあると思います。

そういう人材をこういう会でみんな認めて、取り上げて応援することが大事だと思います。その教科書を作ったからといって全県でできるわけではない。その教科書を持って、その指導ができる人がいなければできないのです。人というのは本当に限られていると思うので、是非、清宮先生を生かしていただけたらいいと思います。

矢野委員長： ほかにいかがですか。

豊田委員： 今回の提案は、ラグビーに限らず、例えば、演劇でもサッカーでも卓球でも農業でも展開できるのかなとお話を聞きながら感じました。全部できるけれども、まずはラグビーで今回進めていくのは、展開の仕方としてはタイミング的にもいいと感じました。

私は、富士市で何度か小・中学生に、職業体験の講座を依頼されて出張講座という形で、座学で農業を伝えています。農業を座学で伝えるのは非常に難しく、「こんなことをやっています」、「こんなことをやっています」という話しかできません。

実際は、畑に立ってもらったほうが伝えやすいのですが、それを言葉で伝えていくために、最近切り口としてミツバチの話をさせてもらっています。

ミツバチが農業の関係で非常に少なくなっていて、ミツバチがいなくなると受粉ができなくなるので、農作物や食に物すごい影響を与えるというように、ミツバチの話をすると物すごく子供たちが興味を持ちます。

蜂は怖いものだとか、蜂は余り自分とは関係ないと思っていたのが、実は食とつながっている身近なもので、大切にしなければいけないというところから、それを守るためにこんな農業をしていますとか、こんな形で農業に取り組んでいますという話をすると、子供たちが納得しやすいです。ただ畑に立って何かを体験していくのではなくて、こういう伝え方は大事だと感じています。

農業を語るときにミツバチの話をしている人が、どれだけ農家さんにいるのかわかりませんが、子供たちにヒットするやり方は、教育の現場で先生たちが伝えていくやり方とは違うと感じています。

この取組を、まずはラグビーをきっかけにやっていくことで、何かいろいろな部分に当てはまっていくのかなと感じましたので、是非進めていただきたいと思います。

矢野委員長： ラグビー1種目で始まって、それで終わりというのではもったいないという御意見ですね。

他にやるとしたら、どんな種目がありますか。

豊田委員： 山本さんがいらっしゃいますし、静岡はサッカー王国ですからサッカーもできると思いますし、卓球も有名な選手がいますので、先ほど知事が最初におっしゃっていた10代でこうやるのだと子供が決めていくときに、やはりそこに保護者、家庭とか、そのバックの環境がすごく大事だと思います。

子供がそれをやりたいと言ったときに、親である人たちがその背中を押すのか押さないのか、またその才能を見抜く指導者がそこにいるかないかで随分進む道が変わっていくように、私も子育てしているので思います。

それを何か県で取り組むとか、教育現場で取り組むことも必要だとは思いますが、なかなか現状を考えると難しいのかなと。

だから、トップアスリートになっていく人たちは、一部の人がそこを目指して行って、いろいろなチャンスや恵まれた環境が重なってトップアスリートになっていくのかなと感じます。

スポーツ選手になった人の話を聞くと、実は子供のころ野球をやっていたけれどもサッカー選手になったとか、本当は野球をやりたいかっただという場合もあるので、教育現場とは離れるかもしれませんが、何かそういう環境自体を整えることも、必要になってくると思います。

矢野委員長： 山本さん、いかがですか。

山本委員： 9ページに、「子供たちの興味を深め、能力を更に伸ばす仕組みづくりが重要である」と最後のところに書いてあって、子供たちの興味を深めるのは普及の部分だと思うので、それは年齢が下がります。小学生の間にきっかけがないと、なかなかそれは始まらないと思います。その普及の部分と、能力を更に伸ばす仕組みづくりというのは、冒頭で知事がおっしゃっていたように、長谷部君が17歳でもう覚悟を決めたとか、14歳でもう覚悟を決めたとか、その年代をいかに評価するかということですね。

先ほどの清宮さんの話も、中学校は選べない方がほとんどです。高校は、野球で甲子園に行きたければ、そこに自分でそれなりに選んで行けますけれども、中学校で大半の子供は公立中学に行くことになります。そこに例えば、ラグビーの先生がいないとか、サッカーの専門的な人がいないということになると、一流のものは学べないのです。

能力を更に伸ばす仕組みづくりについて言うと、子供のほうが先生よりもサッカーのことをわかっているのに、なかなか上達は難しいということは、現実問題としてあると思います。特に中学の間をどうするかは大きな課題だと思います。

意欲や情熱がない子は難しいです。やらされて、そこに連れていかれ

て時間を過ごしているような子供は、能力を更に伸ばす仕組みになかなか当てはまらないと思います。実際にラグビーのボールを触ってみて、経験をたくさんさせるためには、指導者の質がすごく問われると思います。

勉強ができることと、仕事ができることはかなり違います。勉強ができて、仕事ができるとは限らない。勉強ができることは、アドバンテージではあると思いますが、実際に体を動かしてできるかどうかというような経験が必要です。

本田は12歳のときに、卒業文集にセリエAでプレーすると書いてありました。しかも10番を着けて、40億円稼ぐと書いてありました。

僕は静岡ですが、僕も小学校6年生のときの卒業文集に日本代表になって、オリンピックでサッカーを優勝させると書いていました。12歳のときです。そういう覚悟があるかないかが、知事の冒頭の話につながっていくと思います。

今回、ワールドカップに19歳以下の代表を帯同させました。一緒に行って、冒頭の3試合は試合も見させています。ワールドカップは23人なので、試合に出なかったメンバーが、残りの12人ぐらいいます。その子たちと練習試合の相手をさせるのですが、相手はA代表ですから、19歳の子たちが刺激を受けます。昨日、彼らの感想文を見ました。何て書いてあったかと言えば、「日本代表の覚悟を持ちました」「4年後に必ずここに僕は戻ってきたい」と強い言葉がたくさん書いてありました。

自分がA代表の子たちよりも劣っていることを、実際に肌で感じて、体験した。そして、実際にワールドカップを見て、「こんなに素晴らしい世界なのだ」と子供たちが憧れる。子供たちには、「ここに帰ってくる」というチャンスがたくさんあります。次のラグビーのワールドカップもそうです。幾ら説明しても、子供たちが体験しないような仕組みではなかなか難しいのではないのでしょうか。

指導者も先生方も免許を取ったから終わりではなくて、永久に成長し続けるチャレンジは、覚悟を持ってやっていく必要があると思います。

僕は、清宮さんの話に大賛成で、静岡モデルを作ったらいいと思います。「静岡でやっているモデルはすごいね」という静岡モデル。「やっぱり静岡はすごいな」というのを文化・芸術、スポーツにかかわらず、みんなが静岡のやっていることを真似するような仕組みを作ったらいいと思います。サッカー協会でもそう思っています。

17ページに静岡ゴールデンサッカーアカデミー開催事業と書いてありますが、これにはワールドカップで主審を務めた人などを呼んで、レフェリーの研修を開きます。指導者の研修に200人ぐらい来てくれます。ワールドカップの監督をやったような人が来て、実際に指導をしてくれて、指導者はすごく勉強になって、常にレベルアップが図れるような仕組みにしています。審判の話に、中学生が30人ぐらい来ていました。

ユースレフェリーというのがありまして、高校生に子供たちの主審を

やらせるのです。高校生が小学生の試合の主審をやって、子供でも審判にいろいろなことを言ってくるから、それもまた勉強になるのです。そういう育成もやっています。

僕は教育的なものは、スポーツで必ず学ばせることができると思っています。人生の幸せをかみしめるときもあるし、とてつもない惨めな思いもします。一方で、とてつもない喜びにたどり着くこともできるし、失望感も味わう。

それによって子供たちの心が成長していく。何もチャレンジしなかったら、何の経験もないのです。何もしないで、おとなしくゲームをやっている子が、いい子ではないのです。テレビゲームのうまい子が、サッカーがうまいわけではないのです。一緒に汗をかいて、仲間よりも少しでも前に行きたい。みんなで何かを成し遂げたときに、震えるようなとてつもない達成感がある。こういう経験をたくさんの子供たちにさせていくことが、静岡全体のモデルにつながっていくと思います。覚悟を持ってみんなでやれば必ずできると思います。

矢野委員長： 清宮さんの提案は、学校の正規の授業の中にそういう枠を設けようという提案ですか、それとも何か特別授業をやるということでしょうか。

清宮委員： 特別授業ではなくて、担任の先生、普段接している先生が、我々の用意した教本を使いながら、もちろん先生方にも本を読んで勉強していただきたいのですが、面白いと思ったところを子供たちに教えて欲しいのです。

まさにミツバチです。いろいろなミツバチがこの教科書の中にいるわけで、そういったものをそれぞれの先生の方角と感性で、子供たちに教えていく。1時間の4回ぐらいが僕のイメージです。もちろんそれに反対する人が出てきて、できなかつたらそれはしょうがないですが、でもここまでポジティブな内容を準備されて、世界的なイベントが目の前にあるのに、そこに参加しないのかと。参加して当たり前だろうというところが僕の中にあります。あとは先生次第です。

最高のものを用意してもらったので、先生がこれを読んで、「ああそうだったんだ、これを知っていたらもう少し楽しめるよね」というものを子供に教えてもらうのです。

そして、時間が経ったところで、ラグビーの本物の選手たちが小学校に来る。そしてワールドカップ観戦にみんなで旗を持っていくと。

矢野委員長： ボールに触れたりするのでしょうか。

清宮委員： それはもちろん希望があって、興味が湧いてきたらやればいいレベルではないかと思っています。

矢野委員長：なるほど。あるいは、子供たちを集めて本物のラグビー選手の話聞くこともあるのですね。

清宮委員：そうですね。その4回ぐらいの中でやればいいと思います。

矢野委員長：教科書づくりが鍵ですね。教科書は、どういうふうに作っていくのですか。

清宮委員：ラグビーの本を書ける人間が日本に何人かいます、そのあたりの人間はみんな僕の仲間なので、お願いすれば、すぐに書いてくれます。

今回の趣旨を彼らにもう打診をしているのですが、「こういうものがあったらどう」と投げ掛けたら、「今抱えている仕事を置いてでも作る」と、「そんな素晴らしい話はない」という感じで乗ってくれています。

矢野委員長：教科書を最低限、まず学校の先生の数だけ印刷して、配るということですね。

清宮委員：子供たちが、目の前で手にしないと。先生のためだけではなく、子供たちに配りたいと考えています。

矢野委員長：子供たち皆に配るのですか。

山本委員：夢先生みたいなシステムがありまして、学校に経験のある、例えば五郎丸君が行ってくれてワールドカップの話をして、一緒に少し練習するという仕組みがサッカーに限らずありますが、それは若干費用が掛かります。

教科書を配るだけではだめだと思いますので、行くときに必ず持って行って手渡して、そこで実際に体感してもらうのがいいと思います。

諦めなかったらチャンスがあるということ、子供たちに直接訴えることはすごく刺激があります。実際に選手が動いてみたら、とてつもなく大きいし速いということは、子供たちには最高の刺激だと思いますので、そういうグループをつくって、どこまで行けるかわかりませんが、中学校や部活でやったらいいと思います。

清宮委員：やっています。スクラム先生といって、県内の手を挙げてくれた学校に対して授業に行っています。

ただ、今回の話は、1学年に3万人子供がいるのです。来てくれと言われないと、スクラム先生は行かないです。こっちを向いている子供たちはワールドカップが楽しみでしょうがないので、大丈夫なのですが、関心のない層が多分6割いて、すごく関心がある人と全く関心のない人がいるのです。真ん中の層にボールを投げていきたいと思っています。も

ちろん、興味ない人、嫌だという人はしょうがないのですが。

矢野委員長： サッカーの場合は、寝不足をこらえてでも見ていましたね。お父さんやおじいちゃんには子供に教わっていました。おじいちゃんやおばあちゃんは、選手の名前も知らないのですから。

多分、ファンの数は、サッカーのほうがラグビーよりはるかに多いでしょうね。

清宮委員： 同じようなことが起きると思います。ワールドカップをテレビで見ている、子供たちは学校でいろんな情報が入って、お父さんたちに教えたりするのではないですか。

ただ、今回のロシアのワールドカップを見た、あのスタジアムの雰囲気はここに来ますからね。それをどう生かしていくかだと思います。

矢野委員長： 滅多にないチャンスであることは間違いないです。サッカーのワールドカップは、日本でやったのは日韓でやったとき以来ですか。

山本委員： そうです、2002年です。

矢野委員長： ラグビーは初めてですか。オリンピックは2度目ですね。さて、どうしますか、皆さん。

マリ・クリスティーヌ委員： スポーツは、参加して初めて楽しむので、子供たちにラグビーをさせるような体育の授業で、そういうことはできないのでしょうか。教科書があると、本を見た途端にもう嫌だと思ってしまう子がいるではないですか。

清宮委員： そういう本を作らなければいいのです。

マリ・クリスティーヌ委員： あと女の子のラグビーチーム、例えばニュージーランドとかオーストラリアとか、イギリスも女の子たちのラグビーのチームがあります。だから、簡単に遊びの中で、女の子たちにも参加できるようにさせると、女の子は結構学習が早いのではないのでしょうか。

清宮委員： もちろん女性も考えていまして、これもレガシーの一つとして、女子のラグビーチームを立ち上げようと思っています。このワールドカップレガシーの一つです。

中高生は、自分が好きなスポーツをやっていて、少し頭打ちになるのが見えてきます。陸上をやっている子は、「トップになれないなあ」、「でも普通よりは足が速いな」とか、バスケットをやっている背が高く俊敏だけれども、「バスケットではトップになれないな」という子たちには、ラグビーがベストスポーツだと思います。

山本委員： 質問なのですが、中学で部活のラグビー部があるところは、ほぼないですね。部活でラグビー部は、静岡県内でどのぐらいあるのですか。

清宮委員： 静岡県で、私立の学校はあります。

山本委員： 中学では、公立はないのですか。

清宮委員： 中学校は、公立はほとんどありません。中学校にないので、磐田部活をこの会議で作っていただいたのです。そして、今子供たちが順調に育って、巣立っていっています。

山本委員： サッカーもそうなのですが、小学生までは大体男女一緒にできるので登録者数が右肩上がりに増えているのですけれども、中学で部活がないので、登録者数が落ちて、高校になるとまた好きな子が戻ってくるのです。

要するに中学校の3年間に諦めるということです。例えば、この3年間に、静岡は3校に1校ラグビーの女子チームの部活があって、そこに行ったら、この3年間で人は育つと思います。

こういうことを、サッカーでもやりたいのです。女子サッカー部を2校に1校はやりますとか、こちらはラグビーで、あちらはサッカーとなっていれば、女子も一気に全国クラスというのはそんなに難しい話ではありません。

清宮委員： 磐田部活は、磐田が全国で初めてやったのです。地域で部活動を始めるといふ考え方を、今、日本中の県の関係者が視察に来ているのです。

山本委員： 磐田部活は、磐田の幾つぐらいの学校が行っているのですか。

清宮委員： 子供たちがいる学校の数ですね。

山本委員： 全部行っているのですか。すごいですね。

清宮委員： 集まってきて、練習は平日やっていますから、もちろん強くなるわけです。

山本委員： 成果が出ていますものね。

清宮委員： 同じようなことを、今度女子サッカーでやると。指導者不足、子供不足、全ての状況が地域単位での部活動を推奨しているというか、それをやらないと無理だということを証明していると思っています。

山本委員： 近くにトップのモデルが見えているのですごくわかりやすいし、指導者も一流の方がそろっていて、持っている財産を生かすのは良いと思います。

矢野委員長： そのほかの方、いかがですか。

豊田委員： 小学校は総合学習の時間が、授業の中に設けられていると思います。たまたま知り合いに小学校の教員をやっている者がおりまして、総合学習はどんなふうに決めているのかという話をしたときに、例えば、4年生の先生だったら、前の年の4年生の先生たちで、5年生で何をやるか話し合いをして、5年生になったらそれをやるそうです。前の年にそのときの先生たちで内容を決めておいても、異動もありますので、その先生たちが全員上の学年に上がるとは限りません。それで、また新しいチームになって、進めていくようです。

そうすると、その中のメンバーの得意なことに特化したり、地域で進めていることに特化したりするらしいのですけれども、それを決めていくのが非常に難しいそうです。資料を集めるのも先生たちの負担になっていて、何かテーマがあるとすごくやりやすいと言っていました。

今のこの提案は、先生たちの実際のところとフィットしてくるのかなと思ひまして、今回、その流れを見ていくと、時間的にラグビーのワールドカップと総合学習の時間が合うかどうかわからないのですが、今から進めていけば、もしかしたら前半のところ座学と体験はできて、後期の9月に合わせて、タイミングよく進んでいくのかなと感じました。

中学になってくると、どこの時間を使ってそれをやっていくのかを考えなければいけないと思いますが、小学生は総合学習の時間にこれを折り込んでいくことで、できる可能性は高くなるのではないのでしょうか。

それから、せっかく世界各国からいらっしゃるので、世界に目を向けてもらうというところでは、何か食とつなげてもらうのが、子供たちにとって一番わかりやすいと思います。

農業の立場で言うてしまうのですが、この国のこんな料理とか、この国でこんなものが作られているということで、なじみやすく取り入れやすい、その国の食文化を体験できたり、感じられたりすることも一緒にやっていただくと、食と農と体がつながって、スポーツともつながっていくので面白く展開できると思います。そこから興味を持ってもらうのも、一つの方法だと思います。

矢野委員長： 確かに異文化交流という大きな意味がありますね。
埴先生、いかがですか。

埴委員： 清宮委員からラグビーの座学、教科書という話が出ましたが、私も大

賛成です。

私もラグビーについては、かつて関心もなかったし、知識も何もなかったのですが、子供が高校へ入ったらラグビーをやりたいと言って、そこから関わりが生まれまして、面白さを実感しました。

文・武・芸の鼎立と言いますが、教育現場は、どうしてもバランスを取らざるを得ません。ただ、そのバランスを取るにも、鼎の足1本1本の強度にばらつきがあります。

スポーツも芸術も機会均等に、子供たちがそれに触れることで関心を持つ、関心を持って見に行く、そして自分がやってみようという気持ちになれば一番いいと思います。

そういう意味では、やはり教科書を作っていただいて、それを学校の教育現場で子供たちに伝えていくことが大事だと思います。担任がやらないなら私がやります。校長講話というのを作ってありますので、そこでしっかり紹介させていただきます。

かかってみると本当に面白いのです。いろいろな環境や機会をそろえているつもりでも、ばらつきがあります。子供たちがどれに反応するかは、わからないのです。

先ほど、知事から飯塚翔太の話題がありましたが、彼は、中学時代はそんなに力のある選手ではなかったのです。高校1年のときは鳴かず飛ばず、2年のときには故障中、3年になったら突然世界ジュニア優勝とか国体、それからインターハイで結果を出しているという流れです。

指導者はやり投げが専門で、短距離は専門ではありません。そんな中でも、中学時代から陸上にかかわりたいという気持ちがあって、自分の努力でそこまで行ったわけです。

子供たちに深い関心の場が提供できれば、子供たちは自分たちで反応して成長していきます。足りない部分は、個別に学校でできることは、サポートをしてあげればいいと思います。

サッカーは、本当に部員数が多いです。先ほど山本委員からいろいろなお話をお伺いしましたが、今、本校ではサッカー部の部員数が250ぐらいで、すごく多いです。ただ、彼らが学校を変えました。

どういうふうに変えたかと言いますと、挨拶から始まって立ち居振る舞い、学校の中での問題行動が激減しました。本年度は、一件も起きていません。

運動部はどちらかというと、本校の場合はボランティア部というか、近所の地域清掃、どぶ掃除など、そういうものも進んでやります。スポーツを通して子供たちにかかわるということで、幼稚園児相手に1日4時間も、遊びながらサッカーを教えるなど、そんなことを年中やっています。学校の中だけではなく、それを地域に拡大しています。

今、異文化理解と言われていますが、スポーツを通して人とかかわることです。芸術もそうです。バーチャルの世界で過ごす時間が非常に多くて、人間同士の個々のかかわりは薄らいでいます。バーチャルの世界

では、自分勝手にいろいろ自己主張できますし、表現もできます。そこでつくった物差しを現実社会に持ち出してくるので、問題が起こるのだと思います。異文化交流も、遺伝子の世界にまで遡らないと始まらないのではないかと思います。これは本当に大事なことです。

モンゴルとの交流もありますが、モンゴルについても、教育現場でこれまでの歴史的なかかわりをしっかりと紹介していく必要があると思います。悲しいかな、モンゴル史の研究者は、私の記憶に残る限り余りいないのです。掘り下げていろいろと学ぶと、本当に楽しいと思います。

全ての学問、芸術、スポーツ、歴史の流れなどに焦点を当てれば教科書の1つや2つはできると思います。そういう意味では、ラグビーがまず先鞭をつけてくれることを期待しております。必ず生徒には紹介いたします。よろしくお願いします。

矢野委員長： ありがとうございます。

それでは、藤田さん、宮城先生も一言お願いします。

藤田委員： 私も大賛成でございます。

多分、静岡市内だと唯一だと思いますが、私が高校のときに、清水南高校という高校では、全員ラグビージャージを買って、体育の授業で必ずラグビーをやりました。私が高校のときは、ちょうどいろいろなことがあって、世界陸上が草薙であったり、高校総体を静岡で開催したり、30年近く前になりますけれども、そのときに関わって、いろいろなことを覚えています。今回ワールドカップが静岡であるので、これに乗らない手はないと私は思います。

私もラグビーを少しかじったぐらいなのですが、その経験の中から、今会社を経営していて、会社の経営とラグビーは、すごく似ていると思います。前に進むのですが、取ったボールは後ろにしかパスが出せなくて、会社も私たちが1人で前に行くわけではなくて、どんどん新しい仕事を後ろにパスしていかないと陣地が取れてこないのです。

ラグビーのルールや歴史ももちろんそうなのですが、その中からラグビーから学べることとか、背景とか、それが何に共通しているのかも同時に教えてあげられるいい機会になるのではないかと思います。

何かを残していくにはベストなタイミングだと思いますので、御意見をさせていただきます。

矢野委員長： 応援演説をありがとうございました。

宮城さん、どうぞ。

宮城委員： 清宮さんの提案、僕はすごくいいと思ったのですが、座学でというのはある意味では意外な提案でした。普通は、とにかく触ってみようというところから入ります。でも、座学でというのは、自分が小学校5年ぐ

ら이었다ら、物すごく嬉しいだろうなあと思いました。

つまり、来年、ラグビーのワールドカップが近くで開かれると騒がれている中で、僕が小学校5年生だったらなのですが、今、皆様のお話ではほとんど出てきませんが、クラスの半分まで行かないかもしれないけれど、スポーツが苦手なのです。つまり、スポーツが苦手な子たちのことも考えて欲しいのです。

はっきり言って、世の中で偉くなっている人は、若い頃にスポーツが得意だった人が多いです。でも、半分ぐらいの人は苦手なのです。スポーツが苦手だった子たちが、どうやってワールドカップを楽しむか。あるいは、別の言い方をすればコンプレックスをどうやって乗り越えるかということなのです。

僕自身の実体験の話でいいますと、僕は体格がとても小さかったから、そういう意味ではすごくスポーツに苦手意識がありました。一方で、僕の小学校のすぐそばに阪神タイガースの東京での宿泊ホテルがあって、江夏豊とか村山実とかがロビーとかにふらふらいるわけです。一方では憧れましたよね。「うわあ」などと思っているのです。学校ではスポーツは苦手だと思っていながら、でもスポーツ界のスターには憧れると、そういうアンビバレントな気持ちを持っていました。

もし、そのときに学校の授業で、座学で、今回で言えばラグビーの背景とか、あるいはラグビーをどうやったら面白く見られるか、その雑学みたいなことを教えてくれたら、自分は、体は小さくて苦手だけど、そっちのほうでは、思う存分いろいろな雑学を仕入れたりしているのではないかなと思いました。

実際、歴史を調べると面白いのです。ラグビーとサッカーの歴史はとても面白いですね。発祥の頃は、イギリスのある種、大学のエリート校同士の対抗意識から別のルールで、非常に面白い歴史をたどっています。今、ラグビーの盛んな国は、大体演劇も盛んな国になっています。それは多分、ラグビーがきちんとした運動場というか、エリアを確保できないとトレーニングできないことと、恐らく僕は関係があるのだと思います。

少し余談になりますが、僕は今回、アントワープへ行ったときに、ベルギーが、サッカーが強い理由はよくわかりました。

アントワープの駅前には移民街で、本当にお金のない子たちがたくさん住んでいる。でも、本当に小さな路地で、皆サッカーボールを蹴っていました。どんなところでも練習できるのです。

一方で、ラグビーはちゃんとコートが作れるところでないと、なかなか練習ができません。歴史をたどると面白いなあと思っています。

だからラグビーのほうが、言ってみればいろいろな余裕のある人がファンになっていって、結局、演劇が盛んな国とかなり重なったりしたということがあります。

清 宮 委 員： そこ言いましょう。

宮 城 委 員： そんなことが学校で座学で学べると、僕の小学校時代みたいな子たちがそちらには食い付くだろうなと思います。そうすると、ワールドカップをどうやって楽しむか、非常に広がりが出てくる感じがしました。

矢 野 委 員 長： お子さんが家に帰ってきたら、お父さんやお母さんやおじいちゃんやおばあちゃんに教えられますね。

宮 城 委 員： そのとおりですね。

矢 野 委 員 長： なかなか面白い連想が生まれてきますね。
片野さん、いかがですか。

片 野 委 員： 素朴な疑問がありまして、教科書は小学校1年生から中学校3年生まで同じ教科書を使う予定になっているのでしょうか。

清 宮 委 員： 今のところは、小学校高学年から中学校3年生までの6年をターゲットに作れば、まあまあ上も下も読めるのではないかなと、そういう幅の感触は持っています。

片 野 委 員： ワールドカップが開催されるまでの間は、例えば小学校の高学年と中学校の6学年がやるとして、ワールドカップ後は、例えば4年生に固定するとか、そういうビジョンはあるのでしょうか。

清 宮 委 員： 全くありません。何も考えていません。まずはこの1年間です。

片 野 委 員： そうですよ。まずはこの1年間を盛り上げるために、なるべく多くの層に教科書を配付して、清宮先生の言うようなプランで動くことが、10倍、20倍楽しめる要因になると思います。僕自身もラグビーとアメフトの違いがよくわからないような、先ほど藤田委員がおっしゃったように、前にはボールが投げられないことぐらいしかわからないのですが、自分もこれを契機にラグビーについて学んで、少し楽しめるようになりたいと思います。

それと同時に、異文化交流という中で、モンゴルも先ほど話に上りましたが、静岡県がこれから交流を温めていく中で、いま一つ歴史背景も知らなければならないと思います。現状では、グローバルだ何だと言う以前に、調べ学習が少し足りないのかなと思います。

例えば、モンゴルの主食となるものは何なのかと言ったときに、今はどうかわかりませんが、肉であると。それでは、何の肉ですかと。日本の子供たちであれば、牛肉、豚肉、鶏肉ですが、モンゴルの子供たちに

それを聞いたら、まず羊肉を言うのではないのでしょうか。そういう文化の違いを知らずして交流すると、理解しがたいことになってしまいますので、来年にはラグビーワールドカップがありますし、2020年にはオリンピックもある中で、もう少し総合学習でも何でもいいので、静岡はモンゴルとの交流が強いので、モンゴルについて少し勉強できるといいと思います。歴史背景、食文化からのアプローチもできますし、それはスポーツでもできます。

自分は農業ですので、食からのアプローチなのですが、それこそ日本では、養豚、養鶏、養牛、養蜂もあります。養蚕もあります。でも、養羊業というのを皆さん、聞いたことがありますか。ヨウギョウと言うと、どちらかというと窯のほうですね。ガラスや陶磁器のほうを漢字で書いてしまうのではないのでしょうか。それぐらい羊に関して、私たちは何も知りません。

羊に関しては、世界でも3,000種以上の種類がいて、日本は文化を巧みに取り入れて自分たちで昇華してきた民族であるにもかかわらず、なぜ羊ははやらなかったのかということ調べ学習で子供たちに学習してもらうことも可能ではないかと思えます。

小学生レベルだと本当に単純なものから、高校生レベルになってくると今度は宗教や気候、羊の構造や特性が日本に合わないところからのアプローチもできるので、羊の食文化一つとっても、学習の教材としては最高のものになると思います。それが発展して、日本に養羊業が根付く可能性すらあると思います。

異文化に触れることは、日本の文化をさらに昇華、発展させていく一つのツールになると思いますので、国際的な大会がこれから多く控えている中で、もう少しそういう異文化の調べ学習を教材としたものを、もっと子供たちに提供してあげたらいいのではないかと思いました。以上です。

矢野委員長： 大変建設的な御意見、ありがとうございます。
池上先生、いかがですか。

池上副委員長： 池上でございます。私は北海道札幌の生まれ育ちで、羊ヶ丘などという地名があるところなので、私たちは肉を食べると言うとジンギスカンでした。大学の新歓コンパは校内で七輪と鍋を生協が貸してくれるという文化だったので、「そうか、そんなに皆さんは羊を知らないのか」と少し逆カルチャーショックを感じています。

冗談はさておき、清宮さんの御提案に私も強く賛同します。それに関連して3点と、今日の論点2の異文化交流の促進に関して1点、お話ししたいと思います。

私も宮城さんと同様と言うと宮城さんに失礼かもしれませんが、運動は苦手で、小学校のときは駆けっこが大体下から1番か2番でした。と

ころが、何を考えたか、45歳のときに走り始めまして、今市民ランナーとして走っています。袋井に住んでいるのですが、今朝も、エコパの周辺を走ってきました。皆様、最近エコパに行かれたことはありますか。試合するマッチの大きいカラーの写真があって、明日にでも大会が始まりそうな雰囲気がもうできています。

それに関連して、ラグビーは非常に深いものだと思いますので、ルールやその試合のポイントはもちろんですが、豆知識や、先ほど清宮さんがおっしゃった歴史です。「(参加国は)何でこの国なの」と言ったときに、やはり植民地支配を抜きに語れないわけです。小学校高学年から中学生を対象にどの程度それを書くか、書き方は難しいですが、やはり植民地支配とスポーツということは、是非この機会に子供たちの頭の中に描けるようになって欲しいと思います。

それから、ラグビーには、いろいろな体型の人がいます。皆が皆大きければいいというものでもない。その多様な人からチームが成り立ち、多様な人がいるからこそ実は力が出るというか、藤田さんの組織運営の話もありましたけれども、ラグビーをアナロジーとして我々が学び得ることも書けるのではないかと考えています。これがラグビーに関する1点目です。

それから2点目が、先ほどの白井さんのお話にもあったように、テーピングや筋肉の付け方など、スポーツとしてのラグビーに関連することで、ここ一、二週間大変な熱気で亡くなる子供も出ていますが、熱中症等からどうやって身を守るかも是非盛り込むといいと思います。

私事ですが、ちょうど2年前のこのくらいの時期に長男がマラソンの最中に倒れまして、熱中症で2週間意識不明だったことがあります。おかげさまで無事に回復しましたが、彼は2016年の一夏、1カ月と半分を病院の中で過ごしました。ですから全く他人事ではないのです。競技者として、また見る側として、夏の暑さから身を守ることも、是非こういう機会に子供たちが豆知識として身に付けるといいと思います。

3点目が、せっかくその教科書、副読本を作るので、先生方向けの研修を是非システムティックにやりたいと思います。

まず、先生方がその教科書を使って、どういうふうに構成していくといいかを一つのモデルとして示すことで、あとは先生方が現場でアレンジしていくと思います。是非その際に、私も心が震えましたけれども、先ほどの山本さんのお話、惨めな思いもするし、心が躍るような思いもするというチームスポーツの素晴らしさについても話ができればいいと思います。

ですので、教科書を作って配って終わりではなくて、それを使う研修のところまで含めたパッケージで静岡県モデルを作りたいと思います。以上が論点1に関する3点です。

論点2に関しては、異文化交流の促進ということで、個別具体的にになりますが、来年の2019年度のラグビーワールドカップは、今日の参考資

料の2ページを見ると、9月28日から10月11日の間に開催されます。9月下旬から10月中旬で、ちょうど季節としてはいい時期です。物すごく暑過ぎるわけでもないし、寒くもなっていないかなと。

あるとき、袋井市の方と話をし、「なかなか袋井には宿泊施設がないが、どうしたものか」という話を受けました。袋井には3つ、有名なお寺があります。海外の人がお寺に泊まる形はできないだろうかと、アイデアを浮かべたことがあります。可睡齋、油山寺、法多山と3つお寺があります。それぞれがどう考えるか。ここは期待になりますが、海外から来たお客さんにしてみれば、お寺に泊まるのは、かなりプレミアムな体験になるに違いない。

お寺というのは、パブリックなスペースですから、そこで試合までの間、地域の子供たちと交流するような機会を設けることはできないだろうか。ホテルに入ってしまうと、がちゃんと閉まったドアの向こうにいるお客さんを「地元の小学生と交流しませんか」と引っ張り出すのは難しいと思います。

けれども、お寺というパブリックスペースに泊まっていれば、パブリックであるがゆえにいろいろな人と交流ができる。そのようにお寺を場として、子供たちとやってきたお客様の交流の機会がうまく取れないかと考えていますので、是非実現して、学校現場もそれを活用するような展開ができれば素晴らしいと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

大体皆さんの御意見がまとまってきました。

私自身の意見を言いますと、ラグビーは、経営者として組織をまとめ部下を指導する点で素晴らしい思想を持っています。私は、ラグビーを一度もやったことがないし、ボールを握ったこともありませんが。

どこが素晴らしいかという点、よく言われることなので皆様御存じだと思いますが、「One for all, all for one」と言います。一人はみんなのために、みんなは一人のために、これは本当に素晴らしい思想だと思います。それは教育的にも大事なことで、そういう思想をこの際、遠く離れたゲームではなく、実際目の前で行われるのですから、それを小・中学生の教育の現場に落としつけていけたら、素晴らしいと思います。

もう1年ちょっとしかありませんから、この委員会の意見として、具体的にどうしていくかを決めていかないといけません。

次の会議までに、どういうプログラムで、どういう日程でどれだけの費用をかけてやるか案を作って、皆様と相談したいと思います。

この会議は、今度はいつですか。

事務局： 10月15日です。

矢野委員長： 10月ですか。それで1年前ですから、ぎりぎりでしょうね。

ですから、清宮さんの提案の趣旨を受けて、どこまで具体化していくかという問題がありますが、是非事務局の皆様も協力して、一度案としてまとめて、最終的に今度の会議でまとめていったらどうかと思いますが、いかがでしょうか。

マリ・クリスティーヌ委員： 少しだけ発言させてください。

先ほど豊田さんがおっしゃったように、ラグビーで終わるのではなくて、静岡にはこういうイベントがたくさんありますので、私は富士スピードウェイのレースについて、是非やっていただきたいと思います。

1976年に日本で最初に、F1グランプリが富士に来ました。2年間だけ来たのです。事故があつたりして無くなったのですが、やはり静岡県は自動車メーカーの地域でもあるし、ゴーカートなど子供たちも安全にできる競技もありますし、世界中のF1のレーサーたちも本当に頑張っているのです。静岡が持っている全てのスポーツや、競技の可能性をみんなに教えてくれると、そういう可能性がもっともっと子供たちに広がっていくと思いますので、是非続けられるような構想にしていきたいと思います。

矢野委員長： まずラグビーで始めようということでトライして、次の種目を何にするかということですね。豊田さんは、素晴らしい意見を言われました。

国際的なゲームということ言えば、2020年には自転車競技が静岡に来ます。その間に、オリンピックのためにいろいろな種目の合宿も行われます。そう考えますと、可能性はいっぱいありますが、まず取っかかりをちゃんとやらないと後が続かないと思います。

ですから、片野さんが言われた異文化交流、それから池上先生の言われた視点も折り込んで、どうつなげていけるかですね。これは第2ステップだと思いますので、とりあえずラグビーでどこまでやれるかを挑戦してみたらどうかと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、教育の現場にどう具体化するかは簡単なことではなく、大変な作業で、この暑い夏に申し訳ありませんが、事務局でいい知恵を絞り出してください。

そういう方向付けをすることによって、一歩前進ですね。

是非、清宮さんのほうで、教科書を書く人はこういう人であるとか、具体的なことをいろいろと教えていただきたいと思います。

最初は新幹線のように正確な会議の始まりとおっしゃいましたが、終わりまでの時間があと5分しかありません。本当はもっと議論したかったのですが、今、具体的な例として上がったことが全てではなくて、最初のスタートだという認識をして、このテーマについての議論を更に深めていくことにしたいと思います。

それでは、これで今日の議論は終わります。また総合教育会議が開かれますので、そこで具体的な取組を議論することになると思います。

最後に、知事から一言お願いします。

川 勝 知 事： 今日、2時間があったという間に過ぎるぐらい充実した会議だったのではないかと、心から厚く御礼を申し上げます。

文・武・芸三道鼎立と、道が付いています。ですから学問の道、そして武というのはスポーツの道、芸の道と、全て同じように生きる道だと思います。

極端に言えば、いわば座学、小学校ですと算数と国語と理科と社会を午前中だけやって、午後は武芸をやればよいというぐらいに思っております。しかし、これは文科省の規制がありますので、なかなかそういうわけにはいかないところが誠に残念に思っております。

それから、三道を鼎立するのはとても難しいです。けれども、文、すなわちこれ学問です。学問はすごく大切ですから、その学問を貴ぶことが大切で、成績は問わないということなのです。武もスポーツを好むことが大切で、好み方はいろいろあります。下手でもいいわけですから。それが前提なのです。芸も無芸大食でもいいわけですから。だけど、芸術を愛することが大切です。ですから、皆個性が違います。

そして、先ほど宮城先生が、「小学校5年のときにこういうものがあつたらわくわくしただろう」とおっしゃった。5年生、すなわち10歳なのです。まさに1桁から2桁に行く頃だとわかるということです。

しかし、それで本当に一流になれるかどうかは、なれない人のほうがもちろん多いわけですから。しかし、それが大切で、我々は実はこの10代全般、あるいは10代と言っておりますけれども、「30になったら静岡県」と言っているのを御存じですか。

これは10代に一度は家族、父や母から自立して世界を見てみたいと、自立をしてみたいというのは当然出てくるでしょう。それを「行くな」と言う人たちもいますが、行きなさいと。

しかし、そこでいろいろなことを学ぶわけですから。30くらいまでは武者修行と言うと少しあれですけども、徒弟時代と言ってもいいし、修業時代と言ってもいいと思っておりますが、要するに少年から青年になって、まだ自立していない。

個性は違いますが、人生大体80歳から100歳ぐらいまでしか生きられない。時間は、神様によって人類に平等に与えられています。30ぐらいになると、お父さん、お母さんのことも気になるし、好きな人も出てきたりパートナーのことを考えたり、居住のことも考えなくては行けないということで、30前後になると本当に真剣に生きる道のことを考えざるを得なくなります。

そのときに、自分はこれで行くと。その個人差もあるので、25歳から34歳ぐらいまでの間に決めればよろしいと。それまでは試行錯誤で失敗も許しましょうと。

そして、そこで一流になる人も、あるいは一流でないことをしっかり

わかった人間の生き方とまた違ってくると思っておりまして、30、40、それぞれの人生区分の中で10代にどういうものを教えて差し上げていくかと。

私は、もう洋学の時代は、明治150年で一つ大きな区切りを付けたと思っております。単に大学に行ったり、会社に行ったりという目的は、もう学問それ自体が生きたものとなっていないと思っておりますので、新しいものが必要だと。

今日、なぜ生き生きしたのか。具体的な提言と、もうラグビーワールドカップが来ると。それは目に見えたものですから、共有しているわけです。この具体的な提案をやっていきましょう。それで形にしていきたいと思えます。

それから、先ほど委員長が言われました自転車も、自動車にちゃんとしたルールがあるように、自転車もちゃんとしたルールを知らないと事故につながりかねないと思っております、そうした幾つかの切り口から、文・武・芸三道いずれも皆生きる道として、どれが優、どれが劣というものはないと、こういう観点で新しい静岡モデルを作っていくつもりでいきたいと思えます。

ラグビー道、あるいはサッカー道、私はそれで学校ができるなら、学校をつくりたいとすら思っております。そこに行きたくない、自分はむしろちゃくちゃ数学が好きだという者もいますから。

自分はすごくお花が好きだという者もいますが、このお花でも5,000円かかっているのです。何でうちの連中ができないのか。私の部屋にあるのはただです。ですから、そういう商売をしている人がいるのです。誰もがこういうふうに分けられるわけではないのです。いろいろな生き方があるということをお花のことからも学ぶことができます。

ここで静岡モデルを具体的にやっていく、何か突破口の話が出てきたということで、大変喜んでおります。是非夏休みに大いにこの方面で汗をかいていただいて、9月にはいい提案ができるようにと思っております。どうもありがとうございました。

矢野委員長： それでは、今日の会議をこれで終わります。

事務局： 皆様、長時間にわたり、ありがとうございました。

次回、第3回実践委員会は10月15日の開催を予定しております。詳細につきましては、後日事務局から御連絡をいたします。

以上をもちまして、第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様お疲れさまでした。